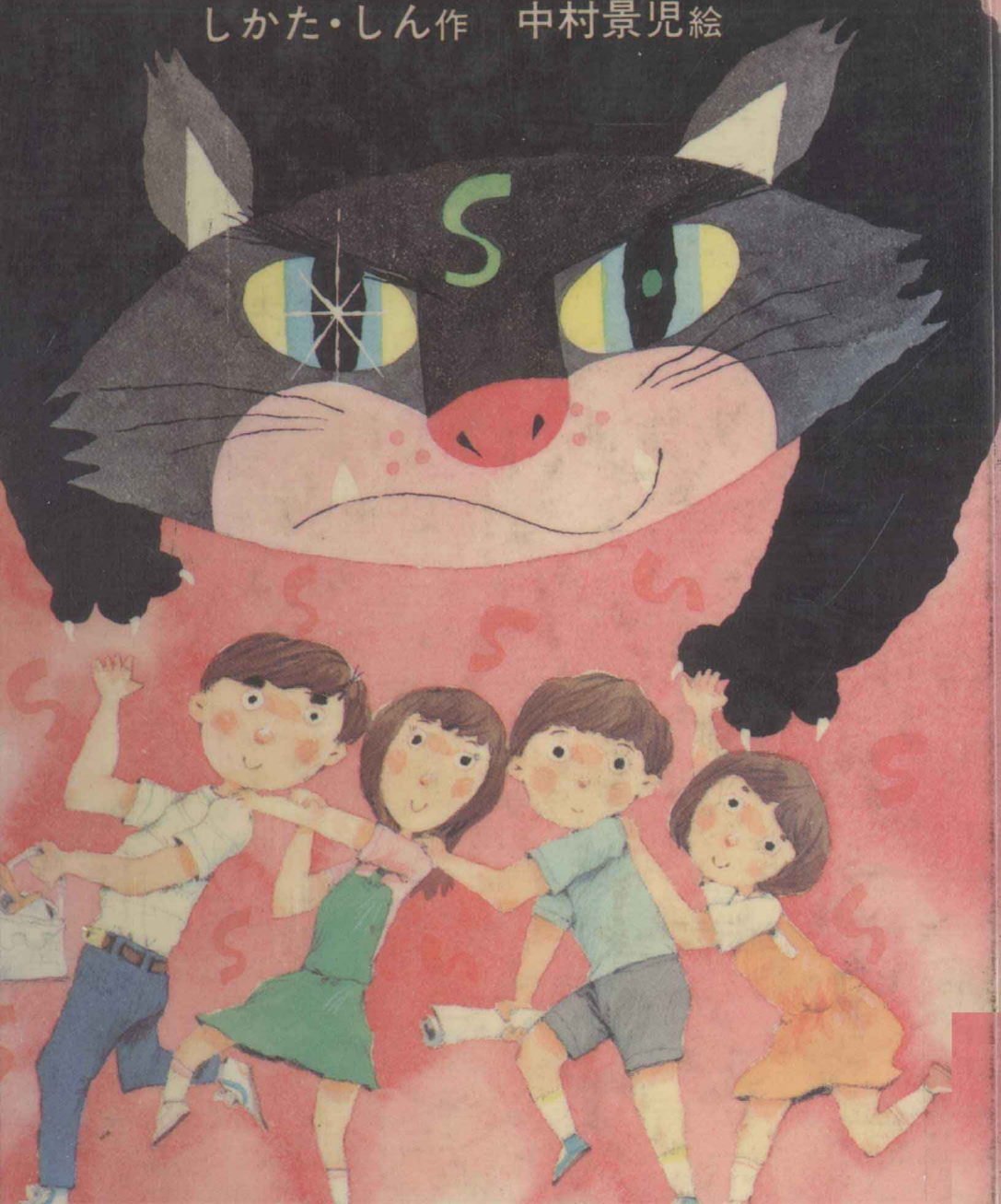


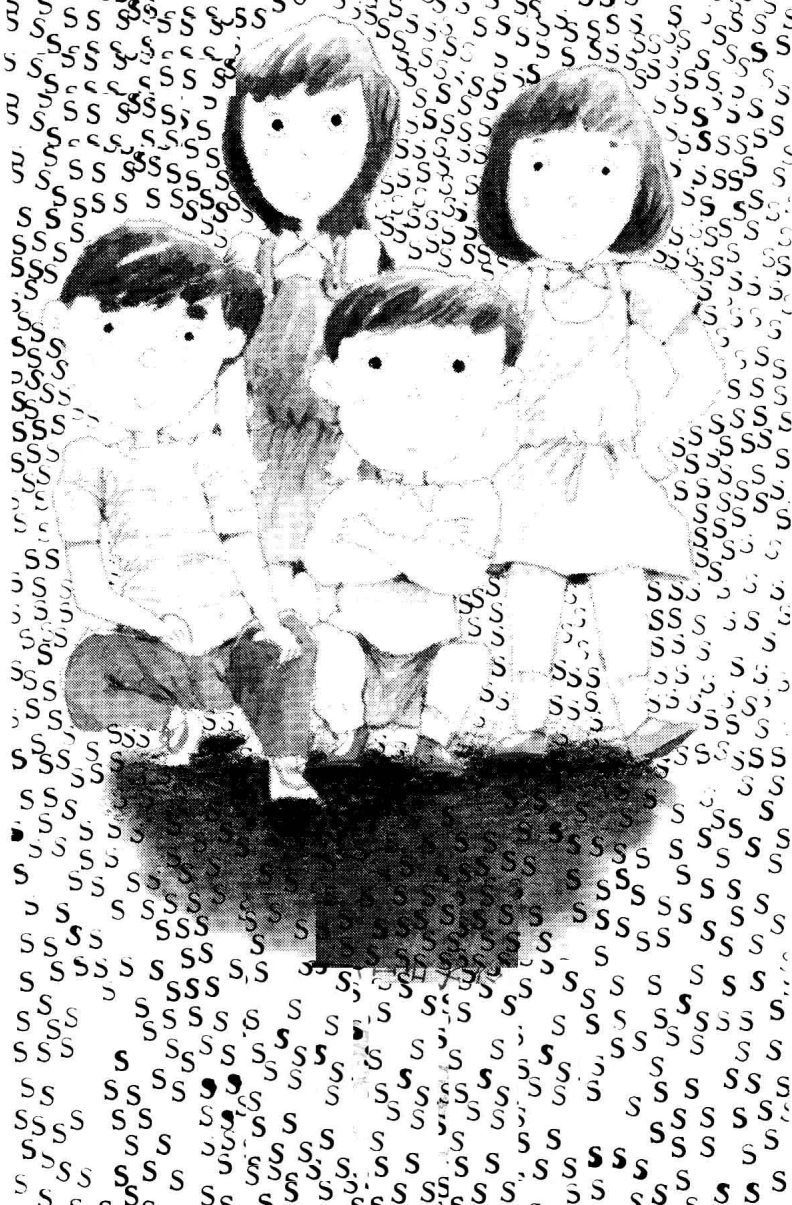
Sサインだぜ! 黒ねこ団

しかた・しん作 中村景児絵



Sサインだぜ! 黒ねこ団

絵本作家 中村景児 絵



913.6 しかた・しん

Sサインだぜノ 黒ねこ団

新日本出版社 1981

142P 21cm (新日本にじの文学④)

新日本にじの文学④

Sサインだぜノ 黒ねこ団

1981年6月25日 第1刷発行

作 者 しかた・しん 画 家 中村景児

発行者 松宮龍起

発行所 株式会社 新日本出版社

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷 3-11-8

TEL 03-478-3311 振替 東京 3-13681

印 刷 光陽印刷 製 本 小泉製本

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。

* この本の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布することは、法律に認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。あらかじめ小社に承諾をお求めください。

も く じ



- 1 S^{エス}サインだぜ、黒ねこ団^{だん}……5
- 2 ニヤン^{ひめ}姫のぼうけん……16
- 3 マキコさん……39
- 4 ダメオのよびだし……58

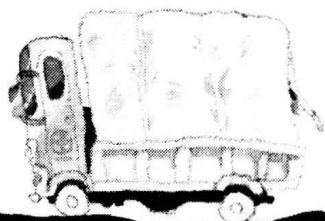


5 ニゲリのあへいゆ……71

6 晴れのちあらし……93

7 宇宙艦隊あらわる！……117

あとがき……142



著 者 紹 介

△作者▽ しかた・しん

一九二八年、朝鮮ソウルに生まれる。京城大学予科在学中に敗戦、引きあげ。愛知大学卒業後、中部日本放送ディレクターを経て作家生活に入る。主な作品は「笑えよ、ヒラメくん」「お蘭と竜太」（新日本出版社）「ぼくと化け姉さん」（金の星社）など。
日本児童文学者協会会員。

△画家▽ 中村景児

一九四八年、熊本県に生まれる。一九七〇年桑沢デザイン研究所卒業。絵本に「ねむりんぼじまのおおとこ」（岩崎書店・学研）、さし絵に「ガラスのねずみ」「しゃっくりこんぺい」（太平出版社）「日本の鬼ども」（けやき書房）など。

児童出版美術家連盟会員、七と八の会会員。



1 S^{エス}サインだぜ、黒ねこ団^{だん}

二階^{かい}の窓^{まど}でふっている白い手が、ちらりと見えた。と、おれの足もとに、ピンク色のハンカチが落ちてきた。

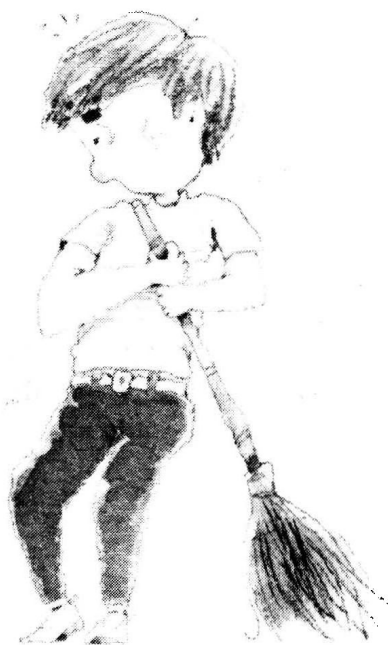
なにか小さな、おもしろい^{おもしろ}がはいつているとみえ二、三回バウンドして、おれの足もとに、うまくころがってきた。

おれはすばやくひろいあげて、なにくわぬ顔でポケットに入れた。

歩きながら、左右^{さゆう}に目をはしらせる。さいわいだれも気がついたようすはない。

二階の窓の人かげは、とうに消^きえていた。

おれは、さっとトイレにかけこむと、だれもないのを見すまして、ハンカ



チをひらいた。はでなピンクのサ
カナのもよりのハンカチは、キャ
ン子のものらしい。

おもしろいかわりの消しゴムとい
っしょにはいつていた、小さな紙
きれには、黒ねこのマークにSの
字がかいてあった。

「おう。Sサインか」

おれはうなずいて、紙きれを小
さくやぶりトイレに流した。

Sサインは、おれたち秘密じよ
うほう部隊・黒ねこ団のきんきゅ
う集合のあいずだ。このあいずを
受けとったら、なにをおいても、

秘密基地へあつまらなくてはならない。

おれは、やりかけた校庭の門のほうのそうじを、おおいそぎでかたづけでラ
ンドセルをせおった。

すばやく左右に目をはしらせる。

おれたちの秘密基地のありかを、つけねらっている、ジイジイやシャクレ、
三年ぼうずのコーチンたちが、そのあたりにいないかどうか、たしかめるため
だ。

秘密じょうほう部員にゆだんはきんもつである。

——よし。

おれはかけだした。

むしあつい七月の空から、灰色の雨が、またふりだした。かさをひらく。

おれの百メートルくらい先のほうを、やはり秘密基地へいそぐ二グリのすが
たが、きりのような雨の中に見えかくれしている。やつも、秘密じょうほう部
隊、黒ねこ団のひとりだ。

「な、なんだい。これは」

あつけにとられたような二グリの、ふとい大きな声が、雨の中からきこえてきた。

「え？」

おれもあわてて、かさの中で目をこすっていた。

たった五日ほどこなかったただけなのに、おれたちの秘密基地は、そのすがたを、むざんにかえていた。

ブルドーザーがうなり、ショベルカーが行ったりきたりして、基地のあった小高い丘はいまや、赤土のどろぬまにかわっているではないか。

黒ねこ団員のキャン子とニャン姫も、かさの中でよりそいながら、ただぼんやりと、このようすをながめている。

「いつからはじまったの。こんな工事が」

やっと、気をとりなおしてキャン子がいった。

かみつきキャン子。

東中市、夕日が丘小学校四年一組。

おっちょこちよいで、いつもキャンキャンどなっているの、そうよばれている。けんかになるとちよっとうるさいあいてなので、かみつかれないように、男の子も用心ようじんしている。うちは団地だんちのマーケットでやおやさんをやっている。「知らないわ。さっき塾じゅくに行こうと思って、とおりかかったら、こんなことになっっているんですもの。びっくりしたわ」

ニャン姫ひめがほそい声でこたえた。

ニャン姫。

色が白くて、ほそくて、いつもうつむいている。男の子たちにじろじろ見つめられているだけでなきべそをかく。それでも、この黒ねこ団だんのことにはいちばんねっしんで、黒ねこ団の名前やサインマークを考えだしたのもニャン姫だ。黒ねこ団一の、いや四年一組でいちばんの美人びじんだ。下級生かきゅうせいのチビたちを手なずけるのがうまいから、しょうらいは保母ほぼさんになりたい、などといっている。

「まあ。わたしたちの基地きちが……」

ニャン姫^{ひめ}が半なきの声をだした。

「あつ、あれ！」

汗^{あせ}だらけになったシャツの前をはだけて、かた手でパタパタ風を入れながら、ニグリのシュウがさけんだ。

ニグリのシュウ。同じく四年一組。

ニグリというのは、かみのけのつむじ——ぐりがふたつある、といういみだ。ほんとうは周一^{しゅういち}という名前だが、だれもシュウとしかいわない。

酒屋^{さかや}さんをやっているおとうさんは、「ニグリのぼうず」とよび、おかあさんは「シュウ」とよぶ。

本人はかつこよく「ニグリのシュウ」と名のっている。黒ねこ団^{だん}の団長だ。

ニグリのシュウが指^{ゆび}さしたほうに、土管^{どかん}がある。おとなでも立って歩けるくらい、大きなセメントの管だ。

その土管がショベルカーでもちあげられて、工事場^{こうじば}のはずれのほうに、はこばれている。

じつは、その土管^{どかん}がおれたちの基地^{きち}だった。

長い土管なので、中のほうにはほとんど雨がふりこまない。小さな腰^{こし}かけを四つほどおいて、会議^{かいぎ}もできるようになっていた。

腰^{かべ}かけの壁^{かべ}のほうの足は、二グリがノコギリで短^{みじか}く切ったので、すわりごちもまん点^{まんてん}だった。

その腰^{こし}かけもきつと、どこかへふり落^おとされてしまったことだろう。

壁^{かべ}には、団員^{だんいん}のれんらくひょうや、よていひょうもはってあった。

ニャン姫^{ひめ}が、いろいろなの^のりを買^かいあつめて、コンクリートの壁^{かべ}にもよくはりつく、エックスサインとかいうのを、やっと見つけてはりつけたのだ。横^{よこ}にはってあった、黒ねこの絵^えもいっしょに、はこばれているにちがいない。

「絵と団員めいぼだけでも、とりにいこうか」

おれがそういったが、二グリが首^{くび}をふった。

「見ろよ」

二グリは、近くにあった竹^{たけ}のぼうで、赤土^{あかつち}だらけの工事^{こうじ}場^ばのはしつこのほう

をつきさして見せた。

きみがわるいくらい、ズブズブとはいっていく。

「ふみこんだらさいご、胸のあたりまで、はまってしまっ

「うん」

この四日ほどふりつづいた雨と、けずり取ったばかりのやわらかい土とで、地面がどろの池のようになっていいるのだ。あきらめるほかなさそうだ。

「で、どうするの」

キャン子が、やけっぱちのような声で、さげんだ。

「基地はなくなっちまうし、ついせきごっこをやる、原っぱはなくなっちまううし——」

「そうだねえ」

おれはうでぐみをして、ちょっと目をつぶった。テレビでいつか見た、秘密じょうほう部員のポーズだ。とたんにかさが風でふっとばされそうになって、あわてた。



秘密じようほう部員になりきるのは、なかなかむつかしい。

「とにかく、おれのうちにきなよ。——そうだ。おれの部屋を、しばらく秘密基地にしたらどうだい」

「いいのかしら」

ニャン姫がえんりよがちにいった。

「いいわよ。どうせパパもママも、六時すぎにしか帰らない、カギっ子ちゃんでしょ」

キャン子がずけずけという。

おれのパパはテレビ局につとめているし、ママも近くの会社へつとめに出ている。六時より前には、まず帰ってこない。

「そうだなあ。そうするか」

二グリがいい、ニャン姫がうなずいた。

おれ。

いままで「ぼく」とっていたが、四年生になったから、おれということに